

## 旅寝の夢 その2——紀行にみる類型と独自性——

今 関 敏 子

キーワード 夢 旅 制度 男性 女性

### 要 旨

「旅寝の夢 その1」(川村学園女子大学紀要第17巻第2号)では勅撰集羈旅歌の夢の表象から、制度的な枠組みと和歌の表現類型を論じた。本稿では、散文作品である紀行について考察する。旅をする主体による夢の表象は、勅撰集の類型と重なりつつ、独自性をもつ。また、男性作者と女性作者では表現の相違がみられる。夢の表象には執筆姿勢、旅のありようが自ずと投影され、作品を特徴づけているのである。

### 1、はじめに

旅の記に必ず旅寝の夢が書かれるということはない。

たとえば、『更級日記』は夢の記述が特徴的な作品であるにもかかわらず、少女期の上洛の記には夢が全く書かれていない。中年期以降の物詣の旅に夢がしきりに記されるように

なるのとは対照的である。かなりの紙幅を割いて綴られる上洛の旅は当時にしては大旅行であった。長い道中、夢を全く見なかったということはないであろうから、旅寝の夢は書く素材には選ばれなかったのである<sup>①</sup>。これは単なる偶然であろうか。

言うまでもなく、紀行は旅する主体によって書かれる。鎌倉期以降は、京と東国の交易・交通が盛んになったことに相俟って、前時代より旅人が増え、紀行も多く残されている。紀行に書かれる旅は、制度的な旅である。いずれも都が基点であり、旅の目的と行程が定まっていた。目的のある旅にも物見遊山の側面はあるが、その表現には、歌枕を踏まえるという伝統の踏襲があった。そして、都が生の拠点であった旅人たちにとっては都が旅の出発点であり、帰着点であった。いかなる土地を訪ねても都はすべての規範であり、異文化に接しても都人であるという自己認識が揺らぐことはまずない。むしろ、都人であることは旅人を支えた。平安鎌倉期の

紀行には、歌枕訪問と都回帰（望郷）という表現類型が見出せるのである。

『更級日記』上洛の旅に夢の記述がない要因のひとつに、都回帰の旅ではないという作品の設定が考えられないだろうか。孝標女が現実には東国に暮らしたのはわずか三年、それ以前は京にいたのである。作品中の東国育ちの娘の「上洛」は、実人生では父の転勤による「帰京」であった。作品には、憧れの京へ、「帰る」のではなく、「行く」旅が仮構されているのである。そこに表出されるのは未知の都への「憧憬」であって、「回帰」ではない。この点で上洛の記は、都を基点とした紀行とは質を異にしている。初めてのの上洛には、都への望郷は無縁である。先行作品には踏襲すべき共通項がない。孝標女の時代、たとえば『大和物語』第二段に書かれる旅寝の夢は望郷であり、既に勅撰三代集の羈旅歌では望郷の詠歌姿勢が類型化していた<sup>②</sup>。また、さらに、『更級日記』の夢の記述には、現実と夢が連関する、という特質がある<sup>③</sup>。実人生の「帰京」の旅でみた夢を、「初上洛」の旅の夢とするにはかなりの操作が必要であろう。

紀行が盛んに書かれ、夢も記述されるようになるのは鎌倉期である<sup>④</sup>。本稿では一二世紀に書かれた『海道記』『東関紀行』『信生法師集』『十六夜日記』および、一四世紀の『とはずがたり』を視野に入れつつ、紀行における夢の表象をみていく

ことにする。

## 2、歌枕・宇津山と夢

### I 夢と歌枕

歌枕の中には夢と結びつきやすい地名がある。たとえば、『十六夜日記』には「醒が井」の例がある。

醒が井といふ水、夏ならば打ち過ぎましやと見るに、かち人はなほ立ち寄りて汲むめり。

結ぶ手に濁る心をすぎなばうき世の夢や醒が井の水とぞ覚ゆる。  
(275頁)<sup>⑤</sup>

阿仏が醒が井を通ったのは、冬。公安二年十月のことである。夏ならば通り過ぎはしないだろうにと思つて見ると歩いていゝる人々は水を掬っているようだ。手に水を掬い濁った心を漱いだならば、この世の夢も醒めることであろう、と詠む。この世を夢と観ずるところにさほどの深刻さはない。一首の和歌から充分に味わえる「憂き世の夢が醒める」と「醒が井」をかけた技巧は、冬の水の冷たさを詠んだものであると知ればさらに冴える。

夢との関わりが最も馴染み深い歌枕は何といっても「宇津山」であろう。

Ⅱ 題詠の宇津山―勅撰集

周知のごとく、宇津山は、『伊勢物語』九段に次のように書かれている。

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、  
わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂  
り、もの心ばそく、すずるなるめを見ることと思ふに、  
修行者あひたり。「かかる道はいかにかいまする」とい  
ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとに  
とて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも

〔夢にも人に逢はぬなりけり〕<sup>⑧</sup>

「駿河なる…」歌が業平歌として初めて勅撰集に登場するのは『新古今集』904番歌であるが、詞書はいたって簡潔で「するがのくにうつの山にあへる人につけて、京につかはしける」とあるに過ぎない。引用した『伊勢物語』傍線部にみられる山伏に出会う状況も、旅人の心細い心情、未知の土地への怖れも見事に捨象されている。

昔男の流離は、生の拠点であった都に住み侘び、あてどなく東国へ下る逸脱の悲劇であった。『伊勢物語』東下りに顕著な昔男の疎外された状況、制度からの逸脱は、そのまま後代の歌人たちには踏襲されなかった。<sup>⑨</sup> 勅撰集では昔男の特殊な事情と孤独な心境は捨象され、共感性・共有性のある旅の

情趣と望郷の念が受け継がれていく。すなわち、物語における反制度的な旅は、勅撰集では制度的な、一般の旅に変容しているのである。

二十一代集に宇津山を取り込んだ歌は16首。<sup>⑩</sup> 望郷の念と鬱蒼とした宇津山の人気のなさ、「蔦」「楓」、小暗い山道が多く詠まれるようになる。宇津山と夢の組み合わせは、『新古今集』904番歌を除くと、次の5首。いずれも題詠である。

和歌所にて、をのことも旅の歌つかうまつりに

家隆朝臣

981 旅ねするゆめぢはゆるせうつの山せきとはきかずもる人

もなし

《新古今集》

後鳥羽院に名所歌たてまつりける時

参議雅経

915 ふみわけしむかしはゆめかうつのやまあととも見えぬつ

たのしたみち

《続古今集》

正治二年百首歌たてまつりける時、旅

前大納言忠良

818 嵐ふくたかねの雲をかたしきて夢路も遠しうつの山越

《新千載集》

旅のこころをよませ給うける

入道二品親王尊円

818 都おもふうつの山道こえわびぬ夢かとたどる心まよひに

《新拾遺集》

旅のこころをよませ給うける

入道二品親王尊円

959うつの山月だにもらぬつたのいほに夢路たえたる風の音  
かな  
《新統古今集》

『新古今集』981番歌、『新千載集』818番歌、『新統古今集』959番歌に表出されているのは旅寝である。『新拾遺集』818番歌には、望郷が詠み込まれる。『統古今集』915番歌、『新拾遺集』818番歌には、宇津山を超えることが信じ難いという比喩として「夢」が用いられる。「宇津山」とは夢を連想させ、さらに「夢」が旅寝・望郷を導く「場」であった。

また、夢は「信じ難いこと」の比喩としてよく用いられるが、宇津山の場合の「信じ難さ」は、まず東下りの「ゆきゆきて」を踏まえた距離である。さらに時間の隔たりが加わる。遠い「昔」と、「都からの距離」の遠さが、「夢のよう」なのである。

勅撰集における宇津山と夢には以上のような表現の枠組がある。紀行ではどうか。

### Ⅲ様々な宇津山—紀行

i 海道記（夢の用例20例・うち夢路1例）

宇津山に関する夢の用例は、まず、旅の概略を述べた作品の始めにある。

（上略）宇津の山路に鳶を尋ねれば、昔の跡、夢にして風の音おどろかす。

（19頁）<sup>⑧</sup>

故事は眼前の現実の光景とは遠く、ただ風が吹くばかりである。詳述される旅の記では、「岡部の里邑を過ぎて遙かに行けば、宇津の山にかかる。この山は、山中に、山を愛するたくみの削り成せる山なり。」（42頁）に始まり、宇津山の形状の特徴や、そこを越えるのがいかに困難であるかが具体的に叙述されている。老いの身にはとりわけこたえる。休憩していると、山伏に遭遇した。

暫くうち休めば、修行者一両客、繩床そばにたてて、又休す。

立ち帰る宇津の山 臥ことづてん都恋ひつつ独り越え

きと  
（43頁）

『伊勢物語』を踏まえ、旅人の孤独と望郷が詠まれる。ここまで夢の用例はない。

この直後に次の文<sup>⑨</sup>があり、「夢」が多用されるのが特徴的である。

行く行く思へば、すぎきぬる此あひだの山河は、夢に見つるかうつつに見つるか。（中略）生死涅槃、猶如昨夢といへるもあはれにこそ覚ゆれ。昨日過ぎにしあとにはけふの夢となり、今日此所をすぐる、明日いづれの所にして今は昨日といはん。誠にこれ過ぎぬるかたの歳月を、夢より夢にうつりぬ。昨日今日の山路は、雲より雲に入る。

作品全体を通して『海道記』における夢には仏教的な色彩が濃く、この世を夢と捉える無常観が色濃く打ち出されている。

ii 信生法師集（夢の用例15例・うち夢路1例）

『海道記』とは異なり、『信生法師集』における宇津山は、「夢」の語が作者の置かれた状況を如実に写し出している。信生法師は、俗名宇都宮（塩谷）朝業。非業の死を遂げた將軍、源実朝の家臣であった。作品は主君を偲ぶ家臣の姿勢で書かれており、前半の旅の記と後半の歌集部に分かれる。作品全体の夢の語例は15例中、旅に関する夢は4例、後述するが、実朝の死を夢と表現する例が3例ある。宇津山は次のように記されている。

宇津山を越ゆとて、路のひとりなる木に札を打ち侍りしに、「昔は、花鳥の情に嘯きて、馬に鞭打ちて越えき。今は相霜のとほそを出でて、僧に友なく過ぐ」と書きつけ侍りて、

13 思ひきや宇津の山辺の現にも夢にもかくて又越えんとは

山中に山伏の会ひて侍れば、かの「夢にも人の」と言ひける事、思ひ出でられて

14 思ふ人あらばや我はことづてん会ふかひもなし宇津の山伏 (13頁)

「現にも夢にも」「夢にも人の（に）」は言うまでもなく、業平歌が下敷きになっており、山伏に会う状況が踏襲されているのだが、昔男そのものではなく、信生独自の事情が投影

されている。「昔」は「今」と対比される（傍線部）。「昔」は実朝在世中、「今」は亡き後の現在である。宇津山を越える状況は、実朝の死を境に全く変わってしまった。勇壮な武士として馬で越えた昔と、老いた僧として独り越える今。想像もしなかった信じがたい変容を13番歌では「夢」と表現しているのである。

iii 十六夜日記（夢の用例11例・うち夢路1例）。

『十六夜日記』では歌枕としての宇津山は十分に堪能されている。

宇津の山越ゆる程にしも、阿闍梨の見知りたる山伏、行きあひたり。「夢にも人を」など、昔をわざとまねびたらむ心地していと珍かに、をかしくも、あはれにも、優しくも見ゆ。「急ぐ道なり」と言へば、文もあまたはえ書かず、ただやむことなき所一つにぞおとづれ聞ゆる。

我が心うつつともなし宇津の山夢路も遠き都恋ふとて  
蔦楓時雨ぬひまも宇津の山涙に袖の色ぞこがる

(281～282頁)

恰も東下りの昔男のように、「阿闍梨の見知りたる山伏」— 知人に折しも出会った、という。それゆえ、夢と現を対比させ、望郷と旅の心細さ、文を託すところなど『伊勢物語』を忠実になぞった表現が効果的となる。

ivとはすがたり(夢の用例26例)

旅をしてみなければわからないことがある。『とはすがたり』には次のようにある。

言の葉もしげしと聞きし鶯はいづら<sup>①</sup>にだに見ず宇津の  
山越え  
(巻四 232頁<sup>②</sup>)

宇津山とは知らず通り過ぎてしまったというのである。歌枕とはいえ、現実の旅では見過ごしてしまうことも多々あったであろうことは容易に想像できる。また、紀行にも虚構は無縁ではないということを考えれば、気づかなかったことにした趣向かも知れない。いずれにしても『伊勢物語』を充分に咀嚼した表現である。

子 敏 関 今

勅撰集には、夢でも現でも人に会わないという旅の状況は踏襲されなかった。『とはすがたり』では、人に会わないばかりか、宇津山にさえ会わなかったという換骨奪胎の妙に二条の独自性が窺えるところである。

v 様々な宇津山の共通性—山伏の登場

宇津山の下敷きとなる昔男の旅は行く当てのない流浪であった。流浪は実在した人物ではなく、第三者によって語られる。昔男の東下り、小町の落魄説話はその典型と言ってよい。伝承の小町像もまさに排除の構造の中で造型された。往年の美女は老醜を晒して放浪し、孤独のまま行き倒れ、悲惨

な最期を迎える。その髑髏は芒の原に放置されたまま、往生叶わぬのである。才色兼備の人物が制度から排除され逸脱して流浪する話型は、後代の他者によって伝承され、文学的感興を呼び起す。反制度的な旅のあり方である流浪は、旅をすなわち主体には決して書かれない。紀行に書かれるのは制度的な旅である<sup>③</sup>。また、題詠される勅撰集羈旅歌の旅もまさしく制度的な表現と言えよう。

紀行に比べると、あらためて、勅撰集の宇津山詠の類型が浮き彫りになる。旅する主体の宇津山表現は、いずれも多かれ少なかれ東下りを踏まえながら、そこにとどまっていはいない。作者による個性が顕著である。現実体験は想像の限界を容易く超えてしまう。人々が実際に旅をしたときに「あの東下りの昔男が通った宇津山」はおおいに意識されたであろう。それがイメージとは違っていることもあれば、知らずに通り過ぎてしまうこともあって、背景や資質の異なる旅人の感慨もそれぞれなのであった。

一方では、共通項もある。山伏との遭遇(引用部<sup>④</sup>)である。興味深いことに、山伏は勅撰歌人たちには注目されなかった。『新後拾遺集』879番歌の式子内親王詠を除けば勅撰集羈旅歌の宇津山詠16首には山中で人に出会う詠すらない<sup>⑤</sup>。宇津山で山伏に出会う舞台装置が、鎌倉期の旅する主体においては猶生きていたのである。

### 3、都回帰—望郷と夢

#### I 勅撰集における旅寝の夢の類型

二十一代集を見渡すと、『千載集』から、羈旅歌が部立として定着する。そして同時に、ここから羈旅歌は題詠が主流になる<sup>⑥</sup>。すなわち、勅撰集羈旅歌の作者のほとんどは、旅する主体ではなかった。平安末期以来、多くの羈旅歌が、都という空間で詠まれた。観念の世界で旅のイメージを膨らませ、それが言葉によって紡ぎ出されていく。歌枕という文化を共有し、共感性をもって「かくあるべきもの」として旅は造型された<sup>⑦</sup>。

この特質は勅撰集羈旅歌における旅寝の夢の表現にも重なる。『千載集』以降、羈旅歌が部立として定着すると同時に、夢が詠み込まれるようになる。そして、旅寝の夢も創造され、みごとに類型化している。それは、住み慣れた故郷・都への望郷であった。この現象は、東下りの流浪性が、枠組の中で捨象され、制度的な旅へ変容する傾向と重なるであろう<sup>⑧</sup>。

紀行に夢が多く表出されるようになるのは、和歌表現に旅寝の夢が定着すると、軌を一にしているとは言えそうである。しかし、宇津山にもみた通り、旅する主体の書く散文の紀行と勅撰集の題詠は同質ではない。

#### II 勅撰集と紀行—夢と望郷

勅撰集羈旅歌の夢と望郷の関連は次のように分類出来る。<sup>⑨</sup>

- i 夢の中で都（故郷）に帰る。
- ii 夢では都に近い
- iii 夢は都にいても旅にあっても変わらない。
- iv 眠れぬ旅寝で夢にさえ都（故郷）を見ない。
- v 都（故郷）の夢は旅の慰め。夢を見たい。
- vi 都（故郷）の人への思いが夢につながる。
- vii 歌枕宇津山に都と夢を詠み込む。

既にみたように、宇津山（vii）はほとんどの紀行で触れられる歌枕である。i～ivの類型はどうか。男性の手になる作品の場合、『信生法師集』には例がないが、『海道記』『東関紀行』には多少の例が見出せる。

『海道記』にある「かがなく暁の麩は、孤枕の團を破る。」（25頁）「峰の嵐、声落ちて夕の袖をひるがへし、湾の水、響きそそいで夜の團を洗ふ。」（68頁）は、いずれも耳慣れぬ動物の声、自然の音のために、睡眠が妨げられることを表現している。望郷と結びつく旅寝の表現は『海道記』に詠み込まれる和歌に2例見出せる。まず、

鈴鹿山さして旧里思ひ寝の夢踏の末に都をぞとふ

（23頁）

は、iの「夢の中で都（故郷）に帰る。」に分類出来るよう。

また、ivの「眠れぬ旅寝で夢にさえ都（故郷）を見ない。」には、

ふくる夜の嵐の枕ふしわびぬ夢も都に遠ざかりきて

(60頁)

が、該当しよう。

『東関紀行』には夢の語例が次の2例しかない。

行く人の心をいたましめ、泊るたくひ夢を覚さずといふ  
ことなし。(121頁)<sup>⑧</sup>

それならぬ頼みはなきを故郷の夢踏ゆるさぬ滝の音かな

(135頁)

いずれも夢見ることもままならぬ眠れぬ旅寝の表出である。

そして、「それならぬ……」歌は、ivの「眠れぬ旅寝で夢に

子 敏 関 今

さえ都（故郷）を見ない。」にあてはまる。

以上のように、『海道記』『東関紀行』には、散文ではなく、

和歌表現に勅撰集羈旅歌の夢の類型が踏襲されている。とこ

ろが、i～viに重なる類型は『十六夜日記』にも、『とはず

がたり』にも見出せない。すなわち、女性作者の作品には皆

無である。

この相違は看過出来ないであろう。

#### 4、男性の紀行と夢の表象

##### I 紀行における男性・女性

紀行に書かれる男性の旅の目的は、公務がほとんどである。たとえば、平安期の最初の仮名日記『土佐日記』の素材は、転勤の船旅であった。そして、鎌倉期以降に特徴的なのが、『海道記』『東関紀行』『信生法師集』のような出家者の紀行である。これらの紀行には、いくつかの共通点が見出せる。箇条書きに示す。

i 概して、仏教的世界観に覆われている。

仏教的世界観に作品が覆われている現象は、作者が出家者であることに帰結されそうであるが、『十六夜日記』の作者阿仏も『とはずがたり』の作者二条も尼である。女性の出家者の作品には、仏教的世界観が濃厚なわけではない。

ii いずれも出家の身で旅をする主体は一人であることが前提である。

たとえば、『とはずがたり』には一人旅であることが強調されている。ただし、従者はいても書かないことがある。

iii 訪問する土地のうち何を書くかに共通点がある。

たとえば菊川における故事―承久の乱の後、関東へ護送の途中、誅殺された葉室宗行について―の記述が共通してみられる。男性の場合、葉室宗行の非業の死と風雅な辞世に共感



が寄せられる。(『海道記』では、菊川の話について「夢か現か、昔もいまだきかず。」(40頁)と書かれている。)『十六夜日記』『とはすがたり』は、菊川に触れていない。

iv『信生法師集』を除けば、既に見たように、男性の紀行では、わずかだが、勅撰集羈旅歌の旅寝の夢の類型に、和歌表現があてはまる。

しかし、女性の手になる『十六夜日記』『とはすがたり』にはあてはまらない。

v『信生法師集』を除けば、出家して旅の途上にある独自の事情が語られることはほとんどない。

女性の場合、独自の事情こそが重要である。『信生法師集』が例外となるiv vの特徴は作者の独自の事情と関連がありそうである。まずは、男性の手になる紀行に夢の表象を辿ってみたい。

## Ⅱ 比喩の夢

### ⅰ『海道記』の比喩

男性の紀行の中でも、とりわけ仏教的世界観が色濃く作品を覆っているのは『海道記』である。夢の表出にも同様の傾向が見出せる。

『海道記』における夢は、その用例のほとんどが比喩である。そして、それは、和歌ではなく散文にみられ、漢文調で

あるのが特徴的である。およそ次のように分類出来る。

○現実にはかなわぬことを夢に譬える。

孟宗が孝行のため筍を雪の中から得たという故事から、孝行できぬ身を夢と譬える例。

○夢の間の筍は、たとひ一旦の雪に求め失ふとも、覚路の蓮は、必ず、九品の露に開き置くらん。(74頁)

○死した後靈魂が四十九日さ迷うことを夢に譬える。

入木の鳥の跡は、千年の記念に残り、帰泉の靈魂は、九夜の夢に迷ひにき。(58頁)

○遊女が客と一夜の契を結んで生きることを譬え

隣むべし千年の契を旅宿一夜の夢に結び、生涯のたのみを往還諸人の望にかく。(61頁)

○この世で見聞きしたこと、過ぎ去った昔が夢のようだという比喩

a いかにかに況や、我も人も、見し世の夢なれば、驚かすに付けて、哀れにこそ覚ゆれ。(55頁)

b 先づ、往事の夢に似たる事を哀びて、次に、当時の昔にかはることを歎く。(69頁)

○この世の榮華のはかなさの比喩。

官位は春の夢、草の枕に永く絶え、榮樂は朝の露、苔の席に消えはてぬ。(59頁)

ii この世は夢

何より『海道記』に特徴的なのは、この世をいかに捉えるかが、夢の比喻によつて示される点である。この世を夢と観じ、そこからの覚醒が悟りへ繋がるという意で用いられている例は2例。

a いかにして現の道を契らまし夢驚かす君なかりせば

(31頁)

b この故に、無始来の睡は夢永く覚め、六趣輪の冥は盲眼ひらけたり。

(76頁)

a は遊女が道心のきつかけを作つた故事に因んだ詠歌。b はまさしくこの世で真実をみることの困難さを述べる。

今 関 敏 子  
『信生法師集』の旅の記にも、『海道記』に重なる仏教観が示される。

19 波の音にうちおどろかす夢路かな永き眠りもかからま

しかば (16頁)

37 常ならぬ世を夢とのみ見る見るもさても驚くことのみ  
きかな (30頁)

19 番歌は、聴きなれぬ波音で眠れぬ旅寝の表出だが、勅撰集の分類ivの「眠れぬ旅寝で夢にさえ都(故郷)を見ない。」とは異なり、無明の闇に生きる現況を詠んでいるのである。仏教的 worldview が投影された表現でありながら、『信生法師集』に『海道記』ほどの観念性が感じられないのは、ひとつには、非

業の死を遂げた実朝追慕が作品を貫いているからであろう。

(上略) ただ昨日今日と移り行く夢を数ふれば、早七年なりにければ、驚かるるは悲しとも愚かなり。(18頁)

没後七年。実朝の死そのものが夢に譬えられる。同じ意味で用いられる夢が歌集部にもある。

201 はかなくて止みにし夢を今更におどろかさじと訪はぬばかりぞ (89頁)

203 夢の後の別れぞこれは長き夜の眠りも醒めば思ひ合はせよ (89頁)

「宇津山」における場合と同様、夢の語には、主君実朝を喪つた信生独自の事情が投影されている。この点で『信生法師集』は、『東関紀行』『海道記』とは異質の作品と言えよう。

### III 睡眠時の夢

『海道記』に、勅撰集羈旅歌に重なる望郷の旅寝の夢の類型が2例あるのは、既にみた通りである。さらに、睡眠中に見た夢の意の語例は次の3例。

i 初更の間は、日比の苦しみに、七編の薦の席に夢みる  
と云へども、深漏は、今宵の泊の珍重に目覚めて、数  
双の松の下に立てり。(34頁)

ii 見し人に逢ふ夜の夢のなごりかなかけろふ月に松風の  
声 (60頁)

iii 鶏鳴八声の曉、旅宿一寝の夢驚きて、立ち出でて見れば、月の光、屋上の西に傾きぬ。(68頁)

知人に会った夢(ii)は望郷に重なる。iiiの直前に「都に日はをまつ人を思ひおきて東の空に月をみるかな」がある。で、これも望郷の夢である。『海道記』に特徴的なのは、睡眠時の夢の意で用いられる夢が、勅撰集の旅寝の夢の類型と重なる望郷、都回帰の傾向を見せており、しかも詳しい夢の内容が不明なことである。

旅の途中で見た睡眠時の夢の内容が具体的に記されないのは男性の紀行の特質である。『東関紀行』『信生法師集』に旅寝の夢の記述すらない。

## 5、女性の紀行と夢の表象

### I 女性の旅の変容

女性作者の書く旅寝の夢には、男性作者ほど顕著な共通項は見出せない。その理由のひとつとして、鎌倉期の女性の旅のありようが挙げられよう。旅する女性の数こそ少なかったであろうが、女性の旅は男性よりはるかに多様性があったと思われる。

平安期の女性の旅は、そのほとんどが物語や、父、夫の転勤による移動であった。女性が自己の体験した旅を書く場

合、男性のように独立した紀行を成すことは稀である。旅は人生体験の一部として位置づけられる。平安期の『更級日記』にみられるように、いわゆる日記文学にジャンル分けされる作品に旅の記が織り込まれる。『信生法師集』の旅が類型から外れるのは、この意味で女性の紀行にきわめて近い性質をもっているからである。

鎌倉期以降、旅の記は女性の日記に大きな位置を占めるようになる<sup>①</sup>と同時に、旅の様相も変容する。まず、旅の目的そのものが、物語や転勤による移動に留まらなくなる。内侍の日記には勅使として出向する公務の旅が記される。そして、すべての中心・規範であった都が揺らいでくる。たとえば、源平の合戦で恋人資盛を失った右京大夫にとつては、たとえ一時期ではあったにせよ、都が確固たる拠点ではなくなる。旅の意味も変容するのである。

とりわけ、阿仏と後深草院二条の旅は画期的である。『とはずがたり』の作者・後深草院二条は、御所を追われて抛り所を失った。出家の身の女の旅には、まさしく流浪の要素が濃厚であった。しかし、小町的呪縛から解放され独自の人生を実現したという点で、『とはずがたり』は、それまでにならぬ新しさを持つ<sup>②</sup>。

『十六夜日記』の作者・阿仏の旅の目的は、訴訟であった。横領された細川庄を取り戻すための長旅は、亡夫・為家の遺

志を継ぎ、和歌の家の後継者を育てる使命感に支えられていた。家を担って、阿仏は旅をしたのである。

## Ⅱ 夢と現実の関連

『更級日記』に旅寝の夢が記述されるのは中年期である。中年期の旅はそのほとんどが物語であり、三十代後半に石山寺、山辺の寺、長谷寺で得た夢告げが記されている。旅寝の夢は神仏からのメッセージに他ならなかった。旅寝の夢に限らず、作品全体の夢の記述を見渡しても『更級日記』に特徴的なのは、現実と夢が連関している点である。主人公は夢を大切にし、生きる指針にしている。

子 敏 関 今

この姿勢は時代の隔たる『とはすがたり』にも通じる。後深草院崩御後、作品の終わり近くに印象的な夢が記される。「夢覚むる枕に残る有明に涙ともなふ滝の音かな（巻五319）322頁」と結ばれる那智で得た霊夢である。この夢は既に論じたように、人生の達成・総括・統合へ向かう二条のプロセスとしての意味をもつ。

また、『とはすがたり』の夢の記述には予知夢が特徴的である。夢は現実を先取り、また、目には見えぬものを映し出す。かつて宮中で錯綜する恋愛模様を翻弄されていた頃、恐れられたのは、秘密が夢によって露顕することであった。同じ発想の夢把握が旅の記にもみえる。夢の語を含む次の和歌二首

をみよう。

夢ならでいかでか知らんかくばかりわれのみ袖にかくる  
涙を  
(巻五 300頁)

君故にわれ先立たばおのづから夢には見えよ跡の白露

(巻五 302頁)

道中で二条は後深草院の病を知る。御所追放の後出家し、旅の空にある二条は、病状を誰に尋ねることもできない。夢を頼るしかない。夢以外にどのような手段があるうか。さらに、我が命に代えてもという願いが叶い、先立つことになったなら、その真実が院の夢に表れてほしいと願う。いずれの歌も夢を最後の伝達手段として頼りにするという趣向で詠まれている。

『更級日記』と『とはすがたり』に共通するのは、夢を信頼する姿勢である。人間存在の意味・現実の意味は、目に見えるこの世の事象だけで把握されるものではない、という作者の人間観を窺うことが出来る。眼に見えぬもの、普段は気づかぬ深いもの、大切なものを、夢が告げるといふ発想は、男性の手になる紀行にはみられない。

## Ⅲ 『十六夜日記』の夢の歌

『十六夜日記』の夢には、『更級日記』『とはすがたり』に顕著な夢託、神仏からのメッセージはない。たとえば熱田神

宮に五首奉納したうちの最終歌

契りあれや昔も夢にみしめ縄心にかけてめぐりあひぬる

(277頁)

は、以前に夢に見た御社にめぐり会えた、の意であるが、こ  
とさらに予知夢や夢の導きを強調しているわけではない。  
「見」を「みしめ縄」にかけて言葉の技巧の面白さにこそ、  
この歌の味わいはあろう。

また、

なほざりに見る夢ばかり仮枕結びおきつと人に語るな

(282頁)

は、いかにも旅寝の歌であるが、これもまた、睡眠時の夢と  
「決して」という副詞が掛詞になっている。和歌の家を継ぐ  
者を教育する母として、子どもに見せるのが、旅の記の目的  
であったとすれば、以上の歌は、まさに和歌の手本となる夢  
の詠であると言い得よう。

歌枕訪問と都回帰の姿勢が一貫している『十六夜日記』で  
あるが、望郷が亡夫と結びついている点が注目される。

都の遠く隔たりぬるも、なほ夢の心地して

立ち別れよも憂き波はかけもせじ昔の人の同じ世な

らば

(286頁)

都が遠ざかるのが夢のようである。この場合、夢は「信じ難  
いこと」の比喩である。続く和歌にある「昔の人」は、亡き

夫為家である。もし、夫が今も世にあれば、こんな辛い旅は  
しないで済んだのである。かつては母としての面が強調され  
てきた『十六夜日記』であるが、亡夫為家の存在がいかに大  
きかったか。旅先で夫が夢枕に立つ。そのことを、真意が伝  
わりそうな和徳門院新中納言（定家女）に文で伝える記述が  
ある。

そのついでに、故入道大納言の、草の枕にも常に立ちそ  
ひて夢に見え給ふ由など、この人ばかりやあはれとも思  
さむとて、書きつけて奉るとて、

都まで語るも遠し思ひ寝にしのお昔の夢の名残を

はかなしや旅寝の夢に通ひ来て覚むれば見えぬ人の  
面影

など書きて奉りたりしを、又あながちにたよりたづねて  
返事し給へり。さしも忍び給ふ事も、折からなりけり。

東路の草の枕は遠けれど語れば近きいにしへの夢

いづこより旅寝の床に通ふらむ思ひおきける露をた  
づねて

などのたまへり。

(296～297頁)

睡眠時に見た夢の内容が記されるのは右の一箇所のみ。それ  
が為家の夢なのである。ただし、贈答歌ゆえの制限もあろう  
が、夢の中に亡夫がどのような姿で出てきたのか、何を言っ  
たのか、どのような場面設定だったのかという記述は一切な

い。しかし、夫への愛情と家を守る使命感が阿仏を支えていることを、為家の夢の歌は示しているのである。

## 7、おわりに

紀行における夢の表象は羈旅歌と同質ではなく、また、紀行作品によっても様々である。概して、女性の手になる作品の方に多様性があり、男性作者は類型的な傾向がみられるのだが、これは、執筆意図の相違、個人の背景や資質がもたらす作風の相違に関連する。

子 敏 関 今

旅をしなくとも、旅の歌は詠めるといふ、羈旅歌の題詠の発想を散文表現に応用すれば、プルチョウの言うように、旅の経験がなくとも、歌枕さえ辿れば紀行は書けるのである。現実になそのような作品はないにしても、歌枕訪問と都回帰という表現類型を使えば、理論上可能である。日次に従って訪問地を書き、時間の進行と空間移動を比例させれば、想像上の旅の記は書ける。旅寝の夢を書きたければ、望郷という類型を踏襲すればよいのである。

従って、紀行として独立し、旅の記に終始している作品ほど、作品そのものも夢の表象も類型化する。紀行の表現類型（歌枕訪問と都回帰の姿勢）と時空（日次と行程・距離）の整合性に忠実な作品ほど、旅人個人の事情が反映し難くなる。

個人の背景が書かれなければ、比喩の夢は類型化しやすく、睡眠時の夢は望郷という類型の踏襲になるか、書かれない。男性の作品における夢の表象に類型化が顕著なのは、独立した典型的な紀行だからであろう。

女性の作品に夢が重要な意味を持つことが多いのは、旅の記が、日記文学にジャンル分けされる作品に組み込まれているからである。日記文学に共通する執筆動機に、喪失体験がある。人生体験の一部、一側面として旅がある。個人の事情・背景が旅の記述に反映しないはずがない。後深草院の存在意義を問い続ける『とはずがたり』のように、睡眠時の夢は具体的に描かれ、現実の意味を逆照射するものとなる。夢と現実とは往還する。

男性の作品の中で『信生法師集』が『海道記』『東関紀行』とは異なる傾向をみせているのは、旅の記述のみに終始した作品ではなく、信生独自の事情が反映されているからである。この点は女性作者の紀行に共通する。実朝の死・妻の死という喪失体験を契機に作品は執筆されている。睡眠時の夢は描かれていないが、夢は喪失の比喩、現世の比喩であることが多く、信生の背景が投影した表象となる。

『十六夜日記』は作品全体を紀行と見做し得る例外的な女性の作品と言え得る。夢の表象に特徴があるわけでもない。この意味では男性の紀行に形態的には近い。ただし、使命感

と目的は明快で、旅を余儀なくされた独自の背景が作品を特徴付けており、数少ない亡夫の夢が作品の核に通じるという点で一線を画す。  
紀行における夢の表象は、旅のありようと作品の特質を白くすと語るのである。

(教授 日本文学)

注

- ① 今関敏子「『更級日記』の作品空間と夢」『更級日記の新研究—孝標女の世界を考える—』(和田律子・久下裕利編 新典社2004)
- ② 今関敏子「旅寝の夢その1—勅撰集羈旅歌の類型—」川村学園女子大学研究紀要第17巻第2号2006・3
- ③ ①に同じ
- ④ ただし、紀行にジャンル分けされる作品のうちには、紀行とは言い切れないものもある。「高倉院殿島後幸記」及び、「高倉院昇退記」には、「夢」の語が多く見出される。しかし、これらの作品は、歌枕訪問・都回帰に、無縁である。内容的には旅の記というより、高倉院追慕記である
- ⑤ 引用は『十六夜日記』(岩佐美代子校注・訳 新編日本古典文学全集48『中世日記紀行集』)に拠る。
- ⑥ 引用は新潮日本古典集成『伊勢物語』渡辺実校注に拠る。
- ⑦ 今関敏子『旅する女たち—超越と逸脱の王朝文学—』第三章旅の造型 笠間書院2004
- ⑧ 二十一代集の宇津山の歌16例は次の通りである。■は夢を詠み込んだ歌である。

新古今集 羈旅歌

和歌所にて、をのことも旅の歌つかうまつりしに 家隆朝臣  
 981 旅寝する夢路はゆるせ 宇津の山 せきとはきかずも人もなし  
 詩を歌に合せ侍りしに、山路秋行といへることを 定家朝臣

982 宮にもいまや衣を 宇津の山 夕しも払ふ鳥の下道 鴨長明

983 袖にしも月かかれとは契りおかず涙は知るや 宇津の山 越え

統古今集 羈旅歌

後鳥羽院に名所歌たてまつりける時 参議雅経

915 ぶみわけし昔は夢か 宇津の山 あととも見えぬ鳥の下道

新後撰集 羈旅歌

旅歌の中に 藤原範重朝臣

578 こよひかくしをるる袖の露ながらあすもや越えん 宇津の山道

玉葉集 旅歌

宇津の山にて 中務卿宗尊親王

1133 しげりあふ鳥も楓も紅葉してこかけ秋なる 宇津の山 越え

新千載集 羈旅歌

正治二年百首歌たてまつりける時、旅 前大納言忠良

818 風ふくたかねの雲をかたしきて 夢路も遠し 宇津の山 越

新拾遺集 羈旅歌

旅のころをよませ給うける 入道二品親王尊円

818 都おもふ 宇津の山 道越えわびぬ夢か たらざる心まよひに

東よりのほりける道にて 法印定円

819 露しげき鳥のしげみを分越えて岡べにかかる 宇津の山 道

新後拾遺集 羈旅歌

旅行の心を 堯尋法師

877 里まではまだはるかなる 宇津の山 夕ある雲に宿やはまし

題しらず 藤原政宗

878 あげば又ひとりやゆかん夜もすがら月に友なふ宇津の山越

式子内親王

879 おのづからあふ人あらはことづつてよ宇津の山べを越えわかるとも

・新統古今集 羈旅歌

左大臣富士見侍らむとて東に下り侍りし時、おなじくまか

り下りしに、宇津の山を越え侍るとて、参議雅経ふみわけ

し昔は夢か宇津の山とよみけることを思ひいでて

権中納言雅世

952 昔だに昔といひし宇津の山越えてぞ忍ぶ鳥の下道

家にて歌合し侍りける時、鳥を 後京極撰政前太政大臣

953 宇津の山越えし昔の跡ふりて鳥の枯れ葉に秋風ぞ吹く

題しらず 法印宋親

954 都にやことづつてやらむ旅衣日も夕ぐれの宇津の山こえ

守覚法親王家五十首歌に 従二位家隆

959 宇津の山月だにもらぬ鳥のいほに露踏たえたる風の音がな

⑨ 引用は『海道記』（長崎健校注・訳 新編日本古典文学全集48『中世日記行集』）に拠る。

⑩ 『海道記』（長崎健校注・訳 新編日本古典文学全集48『中世日記行集』）の底本である尊経閣文庫本には脱落。流布本で補った日本古典全書（朝日新聞社）『海道記』より引用する。

⑪ 引用は『信生法師集新訳註』（今関敏子著 風間書房 2002）に拠る。

⑫ 引用は『とはすがたり』（福田秀一校注 新潮日本古典集成）に拠る。

⑬ ⑦で論じた。

⑭ 『東関紀行』には、山伏そのものではないが、世捨人に会ったという描写「宇津の山を越ゆれば、鳥かづらは茂りて昔の跡たえ

ず。かの業平が修業者に言伝しけんほど、いづくなるらんと見ゆくほどに、道のほとりに札を立てたるを見れば、無縁の世捨人あるよしを書けり。」126頁）があつて、この後に、質素に暮らす世捨人に会ったことが記されている。

⑮ ⑧に同じ。

⑯ 安田徳子『中世和歌研究』（和泉書院1998）第一章第一節旅歌の変遷―「実詠から題詠へ」

⑰ ②および⑦で論じた。

⑱ ②で論じた。

⑲ ②で論じた。

⑳ 引用は『東関紀行』（長崎健校注・訳 新編日本古典文学全集48『中世日記行集』）に拠る。

㉑ 鎌倉期から南北朝にかけての女性の手になる現存の仮名日記は『建礼門院右京大夫集』『たまきはる』『弁内侍日記』『うたたね』

『十六夜日記』『中務内侍日記』『とはすがたり』『竹むきが記』

であるが、旅の記述が全くない作品は『たまきはる』だけである。

㉒ ⑦の拙著第六章「さすらいの造型―阿仏「うたたね」で触れた。

㉓ ⑦の拙著第七章「呪縛からの解放―後深草院二条」とはすがたり」で論じた。

㉔ 今関敏子『とはすがたり』小考―精神の軌跡と夢―（日記文学研究誌第6号2004・3）で論じた。那智の霊夢については、阿部真弓「往生伝としての『とはすがたり』試論―夢を媒介として―」詞林第7号1990・4、藤井佐美「とはすがたり」構想論―夢の記録をめぐって―」論究日本文学第64号1996・5、柳町敬子『とはすがたり』那智の夢―中世熊野信仰との関連から―『平家物語』の転生と再生』（小峯和明編 笠間書院2003）等の論考がある。



旅寝の夢 その2

- ②⑤ ②④の拙稿に同じ。
- ②⑥ H・E・プルチョウ『旅する日本人 日本の中世紀行文学を探る』(武蔵野書院1983)